

近藤紘二

文藝春秋



「サイゴンから来た妻と娘」

「サイゴンから来た妻と娘」

「近藤紘」

文藝春秋

著者略歴

1940（昭和15）年東京生まれ。63年早稲田大学文学部仏文科卒業。サンケイ新聞社入社。静岡支局勤務を経て、67～69年フランスに留学。71～75年サイゴン特派員。現在、東京本社外信部勤務。著書に南ベトナム崩壊時の現地体験を綴った「サイゴンのいちばん長い日」がある。

サイゴンから来た妻と娘

定価 980円

1978年5月20日第1刷

1981年8月5日第18刷

著者 近藤紘一

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 03-265-1211（代表）

本文印刷 株式会社理想社印刷所

付物印刷 共同印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Kōichi Kondō 1978

Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替いたします

目次

サイゴンからの子連れ妻	5
ベトナム式子育て法	45
わが家の性教育	67
妻は食いしん坊	91
夫婦そろって動物好き	123
いくらしたかね?	149
ミーユンの思春期	173
ベトナム難民の涙	203
ベトナムからの手紙	241

装帧 平野甲賀
写真 飯窪敏彦

サイゴンから来た妻と娘

サイゴンからの子連れ妻

テレックス・センターを出て、ホテルの方に歩き出したとき、妙な爆音を耳にした。鈍く押さえつけたような音だった。

「エンジン・トラブルかな？」

足を止め、空を見上げたたん、いきなり町中が対空砲火音に包まれた。

一機のA37戦闘爆撃機が、市役所の尖塔をかすめ、家並みの向こうへ飛び去るのが見えた。

機体を斜めにすべらせるようにして、二機目が続く。三機目は、大統領官邸の上あたりで急激に方向を転じ、そのまま私たちの方へ突っ込んできた。

街路はハチの巣をつついたような騒ぎに包まれた。悲鳴、怒号、狂ったようなクラクションの響き——。人も車もなだれを打って逃げまどう。自転車やモーターバイクがぶつかり合って転倒し、道路に投げ出された人々は、そのまま後も見ずに建物や街路樹のかげに身を隠した。

私も何十メートルかを夢中で走り、市役所前広場のカフェに逃げ込んだ。周囲の建物の壁にピシッ、ピシッと弾丸が当たる音がした。

グエン・カオ・キ將軍配下の空軍タカ派が、ハト派、ズオン・バン・ミン新大統領に対しクーデターに出たのか、と思った。キ將軍は前日、シンパを集めて「サイゴンをスターリングレードにしよう」とおち上げたばかりだ。

タンソンニユット空港の方角から、ズシン、ズシンという爆発音が響いてきた。残存機を自爆させているのか。もしかしたら、キ派は本気でこのサイゴンをぶちこわしてしまう気かもしれない。

ヨロイ戸をおろした店内にスシづめになって身をひそめながら、私は息をころして待った。三二回、四回と、すぐ上空をジェット機が横切る音が聞こえた。そのたびに店内の女性たちが金切り声をあげる。私は、ベニヤ板まがいのカフェの天井を見上げ、一発直撃を食らえば自分の体はコマ切れになって吹っ飛んでしまおうだろう、と思った。

こんなところでやられてたまるか――。

周囲の連中を押しわけて入口に近づき、ヨロイ戸を押し上げて表に出た。右手のサイゴン河の方で盛んに撃っている。呼吸を整え、銃声の合い間をみて、一気にホテルまで走った。

ロビーは、部屋から避難してきた宿泊客でごったがえしていた。顔見知りの外人記者たちに尋ねたが、何も情報は得られなかった。

「誰かき將軍の事務所に電話をしてみろ」

「だめだ。今朝から居所がつかめない」

「クーデターじゃない。総攻撃の前触れらしいぞ」

私は階段づたいに七階に上がった。食堂を横切り、テラスに出て思わず息をのんだ。すぐ目の先、サイゴン河対岸に、幾筋もの黒煙や白煙が立ちのぼっている。その煙を縫うようにして、何機ものヘリコプターや輸送機が乱舞していた。四方八方から自動小銃や機関銃の乱射音が聞こえた。海軍基地のすぐ向こうの町はずれのあたりから、ひときわ間近な轟音が伝わり、見るまに真っ白な煙の柱が空を覆った。上空を逃げまどっていたヘリコプターの一機が、ローターをはじき飛ばされ、煙の中に墜落していくのが見えた。

一時間ほどで騒ぎは静まった。遠くではまだ断続的に二次爆発の音が響いていたが、町の銃声はほとんどやんだ。ロビーに降りると、何人かの記者がフロントの電話にしがみついていた。軍情報部や空港の応答はいぜん混乱しているようだった。

だが、事態はもう明白に思えた。クーデターにしろ、北ベトナム・革命政府軍総攻撃の前触れにしろ、とにかく町は一瞬にしてあの騒ぎだ。もう何が起こっても、サイゴン側には、それに対処する機能や余裕は一片も無い――。

私は部屋に戻り、そのままタイプライターの前に腰を下ろした。

《四月二十八日夕 サイゴン発――》

クレジットを打ったあと、しげんに文章が出た。

《サイゴンはいま、音をたてて崩壊しつつある。つい二カ月、いや一カ月前まではっきりと存在し、機能していた一つの国が、いま地図から姿を消そうとしている。信じられないことだ……》

南ベトナムの戦況がにわかに動きだしたのは、その年（一九七五年）の三月中旬だった。

中部高原の要衝バンメトートの町が、ひそかに接近した北ベトナム正規軍の電撃攻撃を受け、一夜で陥落した。サイゴンはこの不意打ちにあわてふためいた。数日後、グエン・バン・チュウ大統領は、当時まだ無傷であったプレーク、コンツム二都市を含む中部高原全域から、政府側防衛軍を一気に海岸線まで撤退させた。これまでもたびたびインドシナ戦争の趨勢を決定してきた中部の戦略拠点を全面的に放棄するという、思い切った作戦だった。

当時、私は三年にわたる常駐特派員の仕事をいったん切り上げ、サイゴン生まれの妻と娘を連れて東京に戻っていた。テレビの速報でこのニュースを聞いたとき、耳を疑った。薄く広く配置された政府軍を平野部に縮小集結し、首都を含む人口稠密地帯の防^まりを固めよう、という戦法らしかった。が、半年ほど現地を離れていた私には、両軍の兵力バランスがそれほどサイゴン政府側にせっぱつまつたものになっていとは思ひもよらなかった。それ以上に驚いたのは、この決定の唐突さだ。政府軍はもともと、退却の下手な軍隊にみえた。空軍の全面支援下の攻撃では妙に調子づくことがあるが、いったん退き始めるとたちまち臆病風に吹かれ、全軍算を乱しての潰走に陥るといふ致命的傾向を何回も示した。しかも、これほど大規模な撤退作戦はこれまで経験がないはずだった。場合によっては、士気が総崩れになり、とんでもないナダレ現象が起こるの

ではないか、という予感がした。私は妻を連れてすぐ羽田を飛び立った。

予感は、危惧したよりはるかに超スピードで、しかも壮大な規模で、的中した。山から海へ撤退する政府軍は、各所で北・革命側の集中砲火を浴び、たちまち戦闘集団としての機能を失った。敗残兵と、恐怖にかられた避難民が命からがら沿岸諸都市になだれ込み、町々は収拾のつかない混乱の中で、将棋倒しに自壊した。

サイゴンに戻った私は、刻一刻赤く塗りつぶされていく参謀本部の地図を、呆然として眺めた。政府軍を追撃して中部海岸に押し出した北ベトナム軍主力は、三月下旬、いったん北上して北部諸都市掃討を行った。

三月二十三日、旧王都ユエが陥落した。

三月二十九日には、一カ月前まで不落の要塞都市といわれていたダナンも凄絶な混乱の中で自壊した。

同時にハノイの北ベトナム軍司令部は、全軍に、サイゴン総攻撃の号令を下した。各部隊が津波のように南下を開始した。当時、中部海岸を取材に行つて逃げ遅れ、北ベトナム軍に捕えられていた日本人記者の一人は、後にこのときの国道一号線（ベトナム縦断国道）の情景を、
「鉄の塊が南へ、南へと降りていった」と、語った。

四月八日、首都サイゴンも最初の崩壊のきざしに見舞われた。北・革命政府側に内通していた一空軍将校が、単機、町の中心部にある大統領官邸に爆撃を加えた。

そして翌四月九日、首都圏最後の防衛拠点スアンロクの攻防戦が始まった。国道一号線沿いに、

首都から七〇キロたらずのゴム園の町だ。

現地の戦況をヘリコプターで見てきた旧知のイタリア人老記者は、夕方、テレックス・センターで私と顔を合わせるなり、

「おい、もうとてもダメだ。お前もボヤボヤするな」と、どなった。

「しかし、スアندوقが落ちてもまだビエンホアがある。北ベトナム軍も一気には攻め込んで来られないんじゃないか？」

「よく聞けよ。お前はまだ若いから戦争というものを知らん」

相手は急に親爺のような口調でいった。

「戦争っていうのは、みなんだ。こう勢いづかせちゃ処置なしだ。もう向こうの司令部だって進撃を押しえ切れない。いいか。ビエンホアも停戦もあてにするな。スアندوقが落ちれば、奴らの戦車は二時間でサイゴンに突っ込んでくる」

オレはこんなところで死にたくない、明朝一番機でさっさと逃げ出さず、と言いつつ、彼はそそくさと姿を消した。

その晩、私は妻を一人先に出国させることを決心した。彼女は最後の数日間通訳兼助手としてずいぶん役に立った。最後までそばに置いておいた方が便利だったが、もうそんな悠長な場合はなさそうだった。空港に二、三発ロケット弾を撃ち込まれれば、民間機の離着陸は不可能になる。そうなったら、ベトナム国籍の彼女を逃がす手段はもうなかった。

妻を送り出した後も、私は、下町の市場の近くにある彼女の实家で寝泊まりを続けた。記者仲間には、私がこんな、言葉もろくに通じぬ庶民街に住むのを見て、物好きだといわんばかりの顔をしたが、私にとっては、三年余りのサイゴン生活の本拠だ。

ベトナムの町家は、だいたい通りに面した長屋造りになっている。だから人々は、一日中、モーターバイクやランプレッタ（イタリア製の軽三輪）の排気音につつまれて暮らしている。実際、この町に住む人々の、さまざまの強靱さは、この騒音に鍛えられて育ったものではないか、と思えるほどだった。

近所の連中は、この家を「幽霊長屋」と呼んでいた。ずっと以前、その後私たちの居室になった二階の窓際の部屋で、失恋した女性が首を吊ったからだそうだ。私は、妻の従姉のチー・ハイという愉快な婆さんが、部屋におしゃべりにきてもけっして奥の方に入らず、いつも入口近くに控えて、ときおり不安そうな目を壁や天井に走らせるのに気づき、初めてこの話を知った。彼女だけでなく、他の連中も一人ではこの部屋に入ってこようとしなかった。皆、一度か二度は幽霊の姿を見たり、声を聞いたりしており、義理の従姉のマウ・バーなどは、おかげで階段から転げ落ちて前歯を何本か折ってしまった。

ベトナムの幽霊には二種類あるという。

一つは「コン・クイ」といい、これは本物の悪霊で、赤子をかどわかして食ったり、人を呪い殺したりするという。もう一つの「コン・マ」は、悪さもするかわりに、親切にしてやれば向こ

うも人助けをしてくれるそうさ。

この部屋で死んだ女性は、未婚だった。信心深い妻の知識では、たとえ男を知った体でも妊娠を経験せずに死んだものは「コン・マ」ていどにしかなれないはずだった。相手が「コン・マ」なら、ねんごろにつくせばなんとかなろう、と、長く買ひ手のつかなかったこの家を割安で手に入れたという。

さいわい、私が住んでいる間、「コン・クイ」も「コン・マ」も一度も出なかった。

もつとも、階下からピストルの弾丸が飛んできて、あやうくこつちが冥界の仲間入りをしそうになったことはあった。

妻は一族の家長で、たいそうな働きものだった。大家族制の名ごりを残すこの国では、一般に家長依存の風習が強い。しかも、相手の稼ぎがいいとなると、遠縁とか昔なじみと称する連中が次から次へ群がって、およそ気易く食客になりすます傾向があるようだった。持てるものが持たざるものを助けるのは当たり前、という、仏教上の通念も作用しているのだろう。別に金持ちに限らず、求められればそれぞれが分に応じた範囲内で、自分より持たざるものを援助する。安月給の荒くれた兵隊でも、物乞いの老婆がくれば驚くほど自然な態度で施しをするのをよく見かけた。施された方もそれほど丁重にはありがたがらないが、これも、施されて当たり前と思つているからなのだろう。

この辺の感覚はこの国の外交態度にも表れていたようだった。サイゴンもハノイもそれぞれ諸外国からしこたま援助をもらいながら、めつたに「ありがたい」といわない。サイゴンの西側外

外交官は皆こうした態度をこぼしていた。ハノイの東側外交官もその点ではひとしく頭にきていると、たびたび聞いた。

たしかに、たかる方は気楽でも、たかられる方は辛かろうと思う。しぜん、大黒柱は働けば働くほどさらに稼がなければならぬことになり、私が出会った頃の妻もまるで馬車馬だった。日中はビールや清涼飲料の仲買いや地方発送用のトラックの交渉に走り回り、日が暮れると美しいアオザイに着かえて、市内のナイトクラブに出かけた。サイゴンのクラブは、支配人の下に何人かの雇われマダムがおり、客にホステスを割り当てたり、歩合を集計する仕事を取りしきっている。彼女はこの稼業をしていた。

戦況が荒れて道路の治安が乱れ、地方へビールを運ぶトラックが走らなくなると、夜の仕事も唯一の収入源となる。どこの国でもこの世界は女性同士の嫉妬や対立が激しいらしく、年中、マダム仲間でいさかいがあった。それで彼女もこの仕事を始める前、柔道と空手を習ったそうだが、それでも安心できず、いつも飛び出しナイフを持ち歩いていた。ときには小型ピストルまでハンドバッグにしのばせて出かけるので、私は気が気でなかった。

さいわい一九七二年の北・革命軍春季攻勢で町の治安取締りが強化され、盛り場の灯が消えた。仕事にあぶれた彼女は、階下の土間を改装して飲み屋にした。市役所や警察署を走り回って営業許可証を手に入れ、ついでに地区警察の次長も陰の協力者に巻き込んだ。毎月純益の三〇パーセントを「顧問料」として受け取ることを条件に、次長は新しい飲み屋への全面支援を約束したそうだった。

おかげで店は手入れも余り受けず、チンピラ警官のタカリも少なく、結構繁昌した。そのかわり、ときおり酔った兵隊が発砲し、二階の治安はめっきり悪化した。各地の戦闘が激化するたびに、帰休兵らの気もすさんだ。

階下でピストルをぶっぱなししたり、椅子を投げ合ったりする頻度が増し、これはそろそろ危いかな、と思いつながらある日昼寝をしていると、本当に一発飛んできた。銃声と同時に、ベッドにコトンと衝撃を感じたので、下にもぐり込んで調べてみたら、コルトの弾丸がマットを支える留め金に食い込んでいた。数日してまた一発やってきたが、これは肘掛け椅子のわきの床を撃ち抜き、天井も貫通してどこかへ飛んで行ってしまった。天井にポツンとあいたまん丸い穴から青空を見上げながら、私は、早く戦況が静まってくれぬものか、と願った。

なぜ私がこの「幽霊長屋」に住みつくことになったか、その辺の解釈は当事者の間でもまだ一致していない。

妻は「お釈迦さまが、きめたことなのでしょう」という。

私はやはり、あの朝、薄暗い路上で不意にあのダリヤのような笑顔を浴びせられたのが人生の岐路（？）になってしまったのではないか、と思う。

サイゴンに赴任してまもなく、記者仲間の一人から海水浴に誘われた。目的地のプンタオ海岸まで車で二時間以上かかる。帰りが遅くなると道が危いから早朝出発だ、と聞いてひるんだが、「女性同伴だ。君の分もちゃんと用意してある」というので、頑張って夜明けと同時に起きた。